

世界をさまよう物語

ローマ教皇様¹、やっとのことでお声をかけさせていただきます。ですが、私がこれから語る言葉は永遠に残るものです。この声は宇宙の底から発せられておりますが、そこは此岸と彼岸のいずれにあるのかもわからないような場所です。私はこの気のふれた家に生きながら幽閉されました。ですが、この家にはなんら変哲もなく、永らく不思議に思うことすらありませんでした。よく見ると窓だけは少し変わっていましたが、ちゃんとしていました。此岸と彼岸を行き来してみました。気狂いは私の混乱した頭のなかで続いていました。精神病棟にいるのかもしれませんが、私は決して狂ってはいません。この実感の乏しい世界ですら、あなたがたの信じる彼岸の世界よりも幾分ましかもしれません。ですが、記憶が薄らぐなかで、自分がどこから来て、何者なのか判然としなくなってきました。カソリック教徒として誕生したのか、それとも東方ギリシア正教会から教皇の信仰へ改宗した際にカソリック教徒になったのか。団結を知らぬ人々が、永遠の救いを約束されたカソリックに改宗したときにカソリック教徒になったのか。私はセルビア人のなかのクロアチア人なのか、それともその逆なのか。私のこの名前は、本名なのか、それとも洗礼名なのか。

名前は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、私はカソリック教徒の子供たちと東方ギリシア正教徒の子供たちが通っていた国立市民小学校の教員ドブリラ・マルティノヴィッチと申します。国立市民小学校はバニャ・ルカ市近辺のシャルゴヴァツツにありました。当時、独立国家クロアチアが誕生し、シャルゴヴァツツは当国の首都となり、アンチ・グラド（非・都市）になるはずでした。多くの人がこの町をアンティーン（アンテ・パベリッチ）の町と呼ぶでしょうが、それは事実ではありません。私は、この馴致された珍妙な頭に賭けて、これが本当であることをお知らせしたいと思います。

歴史は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、当時新しくできたこの国には、クロアチア人以外誰も住むことができませんでした。ウスタシャは、改宗を拒絶した者たちの扱いに慣れていました。ウスタシャの繁栄のためであれば、七歳の小さな子供を殺しても罪にはなりません。東方ギリシア正教徒の子供たちの、ブラシカ（東セルビア地方名）の血は邪魔でした。

ギリシアの観念は信仰ではない”（Greace ides, nula fides）と言いますように、東方ギリシア正教会は宗教ではないと見なされていました。そのため、残念ながら私の教員だったシャルゴヴァツツの国立市民小学校から、この学校に通うギリシア・カソリックの棄児たちを鉄の箒で除籍させざるを得ませんでした。みな様の教会は、神の国の成立のため鉄のほうきを許されたのでもありました。教皇様の慈悲のもと、ローマ教会は、彼らウスタシャが愛国的行為のなかで宗教的道德心と倫理の境界を越えてしまった場合、彼らを許すと公告しました。

赦しは虚偽ですが、神は真実です。

1 これは、2003年6月22日にイヴァン・メルツの故郷バニャ・ルカ市を訪れ、ペトリチェバツツ・カソリック修道院で彼を聖人に叙した教皇ヨハネ・パウロ2世を指しています。はるか以前の1928年に死亡し、カソリック教会がすべてだった（Aut Kathotirus aut nihil）イヴァン・メルツを聖人に叙するため、パウロ2世はこの場所に来ました。第二次世界大戦中の1942年2月6日、ウスタシャの国、独立国家クロアチアが建国されましたが、その頃、ヴィエコスラフ・フィリポヴィッチ修道士の主唱により会合がもたれました。その会合で後日バニャ・ルカ近郊のドラゴチャユ村、モティケ村そしてシャルゴヴァツツ村のセルビア人系住民を虐殺することが決定されました。こうして一日のうちに女子どもを含む正教徒信者2,298人が殺され、斬首され、虐殺されました。

教皇様、1942年2月7日、指導者アンテ・パベリッチの第二大隊ウスタシャ部隊が学校に押し入りました。彼らの精神的指導者はイヴァン・メルツでした。メルツはローマ教会とキリストに仕える者を愛し、聖座を欲し、闘いました。彼はクロアチアの青少年に驚のように太陽への道を教えました。周囲の者たちは彼のことを至福を受けた聖人と見なしたでしょう。聖人ですよ。また、ペトリチェバツ修道院には、ミロスラブ・フィリポヴィッチ、またの名をトミスラブ・フィリポヴィッチ、ヴィエコスラブ・フィリポヴィッチという司祭がいました。ですが、これらの名がどうであれ、彼は悪魔です。神により名を捨てられた悪魔です。

悪魔は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、私は登録簿の中から、愛おしくて仕方がない東方ギリシア正教徒とカソリックの子どもたちを分けるよう悪魔に強制されました。分けたことで、子どもがどうなるかは知りませんでした。完璧なウスタシャ流の教育を施すため、彼らは糞つたれた黒シャツの殺し屋の手で同級生が殺される場面に、カソリックの子どもたちをまるである授業科目に出席させました。ですが私は彼らが子どもたちをどうやって殺したのか、彼ら自身、自殺したのか、それとも子どもたちを殺したのかわかりません。教室や廊下、階段、校庭、もしくは国語の教科書のページ、いずこで子どもたちが殺されたのかもわかりません。ただ覚えていることは、血なまぐさい殺し屋が、子どもの手から手に小さな棍棒を渡している最中の、助けを求める子どもたちの素直な眼差しだけです。

私はこの世界に長くはいませんでした、この光景はあなた方の世界から私の心にもたらされた最も恐ろしいものでした。

続いて起ったことは、物語のなかに留めることはできません。

正気を越えたことは語るができないのです。

物語は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、それは2月という、常軌を逸したひと月でした。黒シャツどもが学校を破壊したときのことで、雪は腰まで降り積もり、世界を白銀に染めていました。彼らのうち穏やかな顔をしたものは一人もいませんでした。もし私が風刺画を描けるとするならば、私は彼らをゴキブリとして描くでしょう。しかしそうすることはできません。彼らを描写することもできません。彼らを描ききる表現を私は持ち合わせていないのです。非人間的、品性下劣、悪臭に満ちた塵芥といった言葉ですら、十分ではないでしょう。

それはとても悲しいことです。

教皇様、言葉は虚偽ですが、神は真実です。

完全武装した彼らは皆ヘルツェゴヴィナ出身でした。そのことを私は彼らの話し方から理解しました。のちに彼らの幾人かは、子どもたちが恐慌に陥らないために、火器を使用しなかったと述べました。一方、私にはなぜ彼らがとても小さい子ども、実際のところ新生児ですら殺したものに述べたのか、その理由がわかりません。その際、彼らはウスタシャ・ダガーと呼ばれるナイフの一種や、棍棒、斧、くま、銃剣、とりわけ彼らがセルビア人潰しと呼ぶ木の棒の上に鉄球をつけた武器で子殺しをおこないました。また、音が立たないように切れ味の悪いものをもっぱら利用したとも発言しました。これは私には証明できません。ただ私が憶えていることは、慈悲を求める子どもたちの目です。その目を私は決して忘れることはありません。そこにあった目は怯え、うめき声を上げ、恐怖し、死んでいったのです！ 私は別のことも細かく思い出します。セルビア人潰しを握り、几帳面に整えられた爪は鮮血で覆われ、その爪が真っ赤になった一人の虐殺者を憶えています。別の虐殺者は、かち割られた子どもの頭から飛び散る血を浴びないように飛び退きました。雪が子どもたちの絶叫を吸い込みました。

他のことは憶えていません。

夢で私に付きまとう子どもたちの目だけが、私の精神が狂っていることを思い起こさせます。

罪を起こした者は、その罪自体よりもおぞましいです。

罪は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、あるイタリアの領事は、1942年2月7日、シャルゴヴァッツの市民小学校で56人の正教徒の子どもたちが殺されたと、膨大な報告書を提出しましたが、それは真実ではありません。また、これまで正しいとされてきたドイツ人の記録にある53人の子どもたちの虐殺も同様に真実ではありません。どうか理解してください。その際の私の置かれた状態では、誰を犠牲者とするか選択することはできません。もしドラギツァ・クルズヴィッチちゃんがその日学校に来ていたとすれば、このドイツ人の言うことは正しかったかもしれませんが、彼女は来ませんでした。その日、彼女はボリックにいる叔母のもとに行っていたので、虐殺されずに済んだのです。彼岸におりますので、このことを証言します。なぜなら、そこには私を拘束するものは何もなく、真実を述べることは妨げられないからです。

数字は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、私が狂気になる名誉に浴した時、すべては終わっていました。ですが、絶え間なく涙をもたらす残像に耐えがたくて、狂ったものではありません。また、人からこのはかなき世界の全てを洗い落とし、生命の意味と無意味さを痛烈に示すこの場面に遭遇したから、狂ったのでもありません。私がおかしくなったのは、虐殺の後、このろくでなしどもが私に登録簿、つまり血のノートを開かせ、虐殺された一人ひとりの子どもたちの名前のところに、彼ら彼女らが1942年2月7日に自然死したと記入するよう命じたためです。自らの手で登録簿に子どもたちが自然死したと記入するという、恥ずべき行為を私は自らに許すべきではなかったのです！このことについて私は罪を告白します。

キリストと聖母マリアの名のもとに、私は許しを乞います。

全能なる神よ、私を裁きたまえ。

以来、私は癒え難いのです。落ち着くことができず、今後もそれは変わらず、救いがありません。

軽率さが私の罰です。その軽率さによって私は粉々の破片に分解されてしまうような神経過敏症になってしまい、これまで理想としてきたことから遠く離れてしまいました。どうやって狂気に陥ったのか、よく憶えていません。推測するに、狂う直前に起きたことを忘れられなかったためです。日夜、自分の神経が粉々になりました。恐怖に追われ、神経がとても過敏になってしまいました。あたかも犬のように、あらゆることが感じられました。落ち着くため、夢のなかで自分を無にしてみました。救われませんでした。身体が神経網そのものになり、雑然とした無数の血管に絡み取られ、呼吸を拒否し始め、そのような状況を生き抜けるとは思えず、事実生き抜けなかった瞬間を憶えています。あの世の奴と呼ばれ、絶望に埋めこまれたときのことをよく理解しています。

私は今、私にとって最後の世界である、彼岸におります。

人間は死以外のすべてに耐えることができます。

死は虚偽ですが、神は真実です。

教皇様、あなた様は一人の巡礼者のように世界中を旅して回り、遍歴する一人の教皇のように、贖罪状を与え、株式を買い取り、罪を許しておりますが、そうしたあなた様に対しては、彼岸と此岸の両方を見て、両方で暮らす者にしか、物申す権利がありません——旅をすることや、花道に敬意を払い、皺の一つないシャツとレースつきのスカートを着る子どもたちをもち上げ、髪をなげることやめ、手を挙げて信徒を祝福することを控えて、永遠を見つめてください。

意味には飽き飽きしました。偽物の道徳にも飽き飽きしました。人びとの葬儀に涙を流すのはもう充分です。

虐殺からはなんら正義は生まれません。この度の事件もしかりです。

東と西がなく、ただバチカンのみあることを、当時の私は知りませんでした。

あなたのような立場の方がこれから、福音書の旅する証人として、あの恐ろしい犯罪の播かれた場所、つまり虐殺の前日に、ヴィクトル・グティッチ元大司教、ニコラ・ボログリヴィッチ博士、バニャ・ルカ司教、スティロヴィッチ裁判官、そして多数の司祭が集い会合を開いた場所に訪れると知ったとき、私はローマ法王庁の名のもとであなた

がシャルゴヴァツの市民小学校を訪れることを期待したのです。教皇庁の保護の眼差しのもと、あの犯罪が行われた場所にあなたが訪れてくださると期待したのです。かつての虐殺により司教座となった、あの市民の学校の前で黙礼するために、現在のセルプスキ・ミラノヴァツに訪れてくださると期待したのです。そこは亡骸たちと煙の場所であり、残り火を鎮めるために、純真なキリストの血が注がれる場所です。あなたが学校をさまよう虐殺された子どもたちの声を聞き、彼ら死者の声がおこすざわめきや、彼らの歓喜、彼らのうたう歌、そして彼らの朗読する詩を聞くため、いらっしやることを期待したのです。

私は一つのダンボールのボードを、いいえ、ダンボールではなく、虐殺された子どもたちの名前が記された新聞紙を用意しましたが、その用紙をどこかに掲示し、貼ることを許可されませんでした。それを掲示板や入口に貼ったり、校庭の木にかけることも拒否されました。

学校の正門さえかけられませんでした。

誰が許可を与えなかったのかは、お聞きにならないでください。想像できるでしょうか、スルプスカ共和国の文部省が許可を出してくれなかったのです。地域社会や市民、学校経営者、そして学校の運営委員は賛成してくれたのですが、文部省はそうしてくれませんでした。

今はそのときではないと言われました。私たちは橋を築かなければならないのですが、虐殺された子どもたちの名前の載った紙切れは人びとを惑わすに違いありません。セルビア側の真実が明かされることになった今日この時は、相応しい時ではないのです！そんなことはありません！時が経過するにつれ、虐殺された子どもたちの物語はますます世界をさまよい、人の良心にさらなる重荷となります。

なぜなら、過去になることのない物語たちが存在するからです。その物語たちはその場所に滞留しながらも動きつづけているのです。そして、自らを永く生きつづけさせることができます。それらは挫傷やミミズ、毒牙、邪悪な力に対する保護となり、永遠につづくことができるのです。

燃やすことも、破壊することも、置き忘れることもできません。

埋没させ、消し去ることもできません。

虐殺された子どもたちを無名にし、空白のなかに捨て去ることはできません。

愚鈍な文部省は、新聞紙は虚偽であると思っております。

そうではありません。教皇様、新聞紙は虚偽ではありません！新聞紙はいくら薄くて、ぼろ切れであろうとも、雪に埋もれ、風に裂かれ、雨に流され、陽に焦がされ、炎に燃え、雑草に覆われることはありません。たとえ色が薄れ、駄目になり、劣化したとしても、その新聞紙の下からさらに大きな声で、トウモロコシの実がはじけるように、死んだ子供たちは甦るのです。

ラドイカ、シメウン、ヨヴァン、エレナ、デューシャン、デューシャン、ヨヴァンカ、デューシャン、ドラゴミル、マーラ、ミラン、オストヤ、ミレーヴァ、ジューロ、ミラン、デューシャン、ゴスパヴァ、ドラギツァ、ラドミラ、ミロラドゥ、オストヤ、スラヴコ、デューシャン、ゾルカ、ゴイコ、ズドラヴコ、ミラン、オストヤ、ブランコ、ドラギツァ、スラヴカ、リュビツァ、ミレーヴァ、マーラ、ミタル、ダリンカ、ナーダ、スヴェトザル、ブランコ、ヴィドサヴァ、ヨヴァン、ミロシュ、ズドラヴカ、スタメナ、アンカ、ブランコ、ミレーヴァ、マリア、ナーダ、ジヴコ、ミラン、ミリヴォエ。

より優れた正義のかたちがあるに違いありません。

誤謬を生じさせない審判官がいるはずです。

おやすみなさい、教皇様！

翻訳

サニャ・トリプコヴィッチ

Prevod: Sanja Tripković